

優良農家紹介

新天地でばらの大規模経営をめざす

南淡町灘地区は、淡路島の最高峰諭鶴羽山の南斜面に位置し、その温暖な気候を活かして電照ぎく、みかん、びわの産地となっている。

しかし、急傾斜の土地で棚田が多く、平均2a程度の小さなビニールハウスしか建てられないような土地であり大幅な規模拡大は望めない。そのような土地から規模拡大を目的に三原平野へと進出したのが今回紹介する中村三千雄氏である。

1 経営概要

自家労働力：本人、妻、長男

雇用労働力：4名

経営規模：施設ばら

灘 温室 2,300㎡

筒井温室 3,700㎡

合計 6,000㎡

2 栽培の経緯と取り組み

中村氏はみかん、びわ、電照ぎくを中心に経営を行っていたが、平成元年に長男の就農を契機にばら栽培に転換をした。当初、みかん、びわ畑を造成し2,300㎡の温室で栽培を開始したが、ばら栽培を専業でやっていくには急傾斜地の灘地区ではこれ以上面積を拡大する土地もなく、日照条件も悪い。できれば広い土地でばら栽培を行いたいという希望は持っていた。

そこで、平成6年度に認定農業者になり、南淡町筒井に約60aの土地を農業委員会の斡旋で借り受け、平成7年12月に農業経営基盤強化資金（スーパーL資金）を活用し、3,700㎡の硬質フィルムの温室を建設した。

3 特徴的な栽培技術

規模拡大することにより、作業の省力化や安定した販売をする必要があった。そこで、現在では以下のような取り組みを行っている。

(1) 省力化の方法

自走式防除機、切り花選別機の導入による省力化はもちろんのこと、仕立て方はハイラック方式で、

パートの女性にも収穫しやすい方式を取り入れている。

(2) 液肥による栽培管理

ロックウール用の液肥混入システムを導入し、液肥を中心にした肥培管理を行っている。導入当初はメーカーの肥料を使っていたが、単肥配合で液肥を作成するようにし、肥料代を従来の6割に削減した。

(3) ウォーターバケット出荷

出荷先の市場の契めもあり、ウォーターバケットによる出荷を行っている。これは縦箱の中に水の入った中箱をいれて、花束を立てた状態で出荷する方法で、花の鮮度を保ったまま出荷ができる。

また、水上げを行わなくても売ることができるため、花屋さんに好評である。

4 今後の課題

規模拡大するときよく問題となるのが、出荷量を増やした上で、花の品質を下げってしまうということである。中村さんの場合、上記の取り組みの他、保冷車による輸送など、花の品質をより向上させることで対応しようとしている。

面積の増えた筒井温室は後継者の博之さんと常時雇用の4名のパートが中心に作業を行っている。今後は作業の省力化と雇用労力の効率的な利用方法を確立し、より高品質で低コスト生産を目指している。

小林 経浩（南淡淡路普及センター）

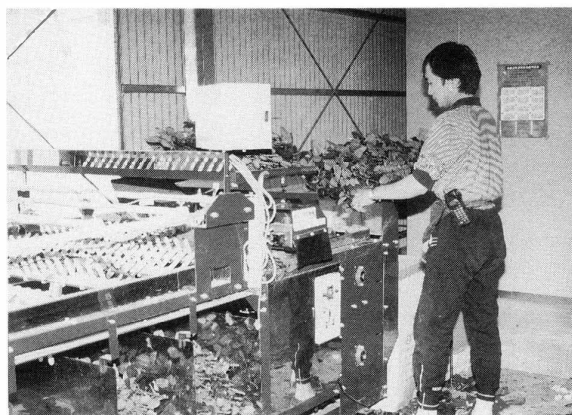


図 選別は特に厳しく行う